

〈人文知〉の不可還元性のために

金 森 修

昨年、『ゴーレムの生命論』（平凡社新書）という小さな本を書く機会があった。ゴーレムという、ユダヤ教のラビが造る一種の人造人間の成り立ちを調べるということを通して、人間そのものの存在様式について、少し考えることができた。もちろん、新書という形式を取ったために議論を充分掘り下げることはできなかったし、そもそも私にとって、ゴーレムは一つのとっかかりに過ぎず、それを一つの起点として、一種の人間論を構築したいという気持ちがあった。だからこの本は系列本の一つ、数珠の珠のようなものに過ぎなかった。私の頭の仮想世界の中では、他の複数の珠が既に存在しており、それらが集まった段階で臆気ながらもより統合的で統一的な一つの〈概念的数珠〉が出来上がるはずだった。

ところが、そんな中で二〇一一年三月に、日本社会全体を揺るがせる大事件が起きた。地震と津波という天災と、エネルギー行政の歪みや失敗を背景に、その問題性が露わになった福島第一原発の事故という人災である。相当量の放射性物質が環境内に放出され、一時期、水や食料などにも影響を及ぼした。希釈され、しかも仮に害があったとしても、それは数年後の癌の発病率の違いなどという形で出てくることが多いために、その被害の全貌を正確に知ろうとしても恐らくは無理だろう。だが、逆にいうならそれは、〈環境悪〉としての放射性物質のそもそもの凄まじさを、われわれに見せつけるものでもある。これだけのことが起きてしまうと、私の仮想世界の中で〈数珠〉が放っていた概念的方向性と、社会的事象との間の齟齬が大きくなりすぎた。そのため、予定していた何冊かの本を、私は書く気を失ってしまった。仮想的な数珠は、未然の状態のままにどこかに四散してしまった。

ともあれ、私が構築したいと考えた人間論は、全く無に帰したとも思わない。まだ極めて不完全なものとはいえ、とにかく現時点で言いたいことを最低限素描しておくことは、目標を失ってやや戸惑い気味の私自身にとって重要な下準備になるのではない

か。そう思った。以下のエッセイは、そのような事情で書かれたラフな素描に過ぎないが、それが私自身のためだけではなく、少しでも読者に裨益することがあるとすれば幸いである。

第1節 一般的前提

(A) 私が構築したいと考える人間論のために、やや一般的な前提を確認しておきたい。一九世紀フランスで活躍した生理学者、クロード・ベルナール (Claude Bernard, 1813-78) の幾つかの作業を分析してみると驚くことがある。糖尿病の病理的意味にしろ、一酸化炭素中毒のそれにしろ、扱われている問題群やそこで作動している概念の様子を垣間見ると、僅か一五〇年ほど前の時期であるにもかかわらず、人間は人体について、驚く程ラフな知識しか持っていなかったということが実感されるのだ。その事実が与える驚嘆の念は、その後、特に二〇世紀後半以降の関連分野の急速な発展と対比させてみると、一層大きなものになる。一九世紀人と現代のわれわれとでは、生理学的・生化学的知識水準において段違いの違いがある。しかも、その生理学的知識は〈精神の牙城〉であるはずの脳をも対象にして、その鋭い分析装置を働かせている。一定の化学物質や電気信号と感情や思考との関係が徐々に解明されていくとき、一九世紀の唯物論が語っていた思考と胆汁との類比や「生命とは蛋白質の存在様式である」といった言葉が、現代に見合った洗練を手に入れることになる。そして人間はますます生物としての自己理解を洗練させ、同時に一種特殊な物質系としての自己理解に邁進していくという風情の中にある。これは、一般論としては正しいのである。

いま、習慣に従い、生物として見た場合の人間をヒト、文化的・社会的存在として見た場合の人間を^{ひと}人と書くことにしよう。〈人とヒトが織りなす関係の定位〉という問題自体が一つの重要な主題になりうるが、このエッセイでは、この話題を解決すべき問

題として定立するのではなく、この話題に関して或る種の〈見切り〉をする。そして、ここでは論証の手続きを省き、次のような判断を提示する。——上記のように、脳も含めた人体に関する急速な知識水準の向上、つまりヒトとしての自己理解の精緻化を実現しつつある人間は、それと相即的に古典的人間観を衰退させているように見える。なぜなら〈古典的人間観〉は多少とも、ヒトを人として見るという行為の中にその本質を表現し続けようとしてきたからだ。ヒトについての知識が精緻化されればされるほど、古典的人間観は後退し続けなければならないのか。いや、そうではない、と私は考える。ヒトについての知識が今後とも発展していくという予想自体は恐らく正しい。しかしそれは、古典的人間観の衰退や後退を意味するわけではなく、むしろヒトについて分かれば分かるほど、人間は単にヒトとしてだけ生きているのではないということが明らかになっていくはずだ。古典的人間観は徐々に衰退していくという自己了解自体が、古典的人間観にとって、自己の過小評価に繋がる。人はヒトでもあるが、ヒトだけではなく、むしろヒト以上のものとして生きようとしている限りに於いて人たり得ているということを確認に意識すべきなのである。

これを簡単に言い換えるなら、われわれ人間が人として生き、人として生きていると自覚するとき、人間は〈自然〉と〈文化〉との間の差異や緊張感の只中に身を置き、絶えず自然から離れようとする文化的存在として生きているということだ。われわれは文化的で社会的、そして歴史的な存在である。ヒトの側面を研究するには自然科学的アプローチが最も有効だというのは言うまでもない。ということは、われわれ人間がヒトではなく、ヒト以上のものたらんとするとき、人間は、自然科学では取り扱えないような領域を、自然科学的ではないアプローチや受容の仕方によって経験することで自らの人的性格を再確認し、それを再構築しながら生き続けているということだ。どれほど自然科学が発展しようと、人間は、自然科学の眼差しとは違うスタイルの眼差しを持ち続けることができ、まさにその可能性の中に自己同一性を探ろうとし続けるだろう。

いま、一般に、自然科学的な知識生産様式、並びにその結果得られる自然科学的な知識を、他領域の知識群がそれを模範とするべき準拠と見なし構わないとする考え方、そして他領域の知識群がたとえ

現時点では自然科学的ではないにしても、遅かれ早かれ自然科学的知識の様式に近づいていくはずだと見なす考え方のことを自然主義 (naturalisme) と呼んでおく。私がここで述べている人間理解、私が言うところの古典的人間観、ないしは人をヒトよりも最終的には重視するという考え方は、その自然主義を否定するという意味で反自然主義的なものである。反自然主義の成り立ちを見据え、それを前提にしない限り、いかなる人間論も自己貧困化と自己単純化の隘路に入り込まざるを得ない。

(B) さて、以上を議論の大前提とする。この〈反自然主義の成り立ちと根拠〉自体を主題として、それについてより論証的な補強をするという作業もありうるが、上記のように、ここではそれは行わない。これはあくまでも議論の大前提として措定した上で、それを出発点として、次の議論に進むことにしたい。

ヒトとして在るとき、つまり呼吸、循環、栄養、生殖など、他のいろいろな生物とも大幅に重なる行為の連関の中にあるとき、人間は自然の中にフィットして過ごしていると述べて大過ない。だが私は、人はヒト以上たらし、ヒトのあり方から乖離しようとし続けると述べたのだから、換言するならそれは、人間は自然の中にいるようであり、そうではないということを意味していることになる。生物であるにもかかわらず、生物としてだけ在るのではないという意味で、人間は自然から乖離している。人間は〈生物圏〉の中で安寧に鎮座するのではなく、生物圏をはみ出て、人間にしか作れない〈人間圏〉の中で生きている（進化的にみて人間と近い生物、例えば霊長類がどの程度〈人間圏〉とは違うのか、それは生物学や比較心理学の専門家に委ねざるを得ないので、ここではその問題は扱わない）。

人間が神（または天）と融合し得ないのは当然である。そこに問題性はない。より微妙で興味深い問題は、人間が自然からは離れた根無し草のような生物だということ、そうであろうとしているということ、そのように自己理解し続けようとしていることという点の中にある。単純化していえば、〈人間圏〉は、いわば神や天にも到達できず、さりとて〈自然のライン〉にも融合できずにフワフワ浮いている一種の根無し草である。

人間は、都市という概念と関係が深い文明の諸相においては当然ながら、大地や耕作という概念と関

係が深い文化の諸相においてさえも、自然逸脱という成分を本性的に抱えている。その意味で人間は、どこか病理的な相貌を備えている。ここで私が使う〈病理〉という言葉は、日常的語法での価値観とは必ずしも符合しない。病理は生理よりは好ましくないものとして捉えられるのが普通だが、私がここで使う使い方は、人間はそうでしかありえないという意味で言っている。だからそれは必ずしも悪や歪曲とは直結しない。人間が人である限りで、人は自然から逸脱しており、それは不安定で浮動的なあり方しかできず、そうでしかありえないのだから、その〈病理性〉は、それが普通という意味では生理と述べても構わないとさえいえる。ただ、逸脱や不安定性、浮動性を強調するために、この言葉を使っているだけだ。

さて、それでは少し議論を進めよう。〈人間圏〉は〈自然のライン〉には融合できずにフワフワ浮いている。〈人間圏〉が自然から逸脱・乖離しているということは、その成立根拠は自然の中にはないということである。神の超越的裁定、神の超越的設計をとりあえず度外視するなら（われわれは一神論者ではないと想定する）、われわれは人間を人間たらしめるものを、人間自体の行為や、人間自体の思考の中に求めざるを得ない。〈人間圏〉の成り立ちを定めるのは、神でも自然でもなく、人間自身なのだ。では、誰が〈人間圏〉の概要やその輪郭を設定するのか。それはその時代その時代の権力者なのだ、と言いたい気持ちに駆られるが、それではあまりに単純だ。絶大な権力をもつ権力者でも、自在に、かつ単独で〈人間圏〉の概要を設定するなどということはあり得ない。それを決定するのは単独の人間（絶対主義王政下での王）または、寡頭政のような少数精鋭集団だというよりは、或る時代、或る地域それぞれの中で作動している〈言説構制〉の総体だとしか言いようがない。では、その〈言説構制〉とは何かと問われるなら、それを綿密に論じようとすれば別個の主題になってしまうので詳説はできない。最低限の説明を与えるなら、それは、例えば法体系、行政制度、哲学体系、宗教体系、正統的な文学や芸術作品、多少とも共有される慣習や歴史認識、科学的知識の生産制度などの総体である。いつどんなときでも、何でも言い得る、ないしは考え得るというものではなく、当該の人物がその中にいる〈言説構制〉の総体と極度に背反し、その根幹を否定するような発話や発想

は、言い得ない（少なくとも危険性なしには公表できない）、または思い浮かばない。互いに緩やかにとはいえ支え合う或る一つの言説構制の中で、一つの緩やかな〈人間圏〉が内部領域で分節され、辺縁部で輪郭づけられていく。われわれは〈言説構制〉によって自分たち自身を世界や人間の中に位置づけていく。

ところで、その〈言説構制〉は、例えば中世日本の〈言説構制〉と、古代ギリシャのそれとでは多くの違いを含んでいる。時空間的差異をもちながらも、全く見分けがつかないほどに似ている〈言説構制〉などは、恐らく存在しない（経験を超えることなので、断言はできない）。この判断の系として出てくるものとして次のことを主張したい。〈永遠の人間性〉なるものは存在しない。また先に私は、〈人間圏〉の成立根拠は自然の中にはないと述べた。それもやや言い換えながら系を探すなら、〈自然法〉なるものは存在しないという判断となって結晶する。綿密な論証抜きで語っているので断言するだけの根拠はないが、それでも私は〈永遠の人間性〉も〈自然法〉も存在しない、とあえて繰り返し強調したい気持ちに駆られる。なぜならそれは、大きな思想的含意を持つからだ。

では、それら二つの概念を奉じる人々は端的な詐欺師なのだろうか。そうは思わない。いかにもフーコー主義者らしい物言いにはなるが、それは次のように考えておきたい。〈永遠の人間性〉や〈自然法〉は、共に限定的経験を越えた内容を必ず含むから、その意味で形而上学的特性を備えているが、それらの概念を楯に議論を造る人は、その同時代人たちに、脱・限界的で超越的、または俯瞰的な視座の存在可能性を示唆したり、〈実定法〉の解釈論争だけでは見えてこない議論の条理を一瞬浮き彫りにすることで同時代の法体系を批判したりすることができる。つまりそれらの概念が一定の意味をもつのは、それらが同時代人たちに対して一定の政治的効果をもつからだ。それらは〈真理の政治学〉の位相で検討されるべき話題なのであり、文字通り、それらが存在する・しないという〈概念世界の存在論〉の位相で語られるべき話題ではないのである。

第2節 ゴーレム因子と〈境界人間論〉

(A) さて、以上を一般性の高い前提としておこう。ところで、この小論で〈人間圏〉のことや、それを形づくる〈言説構制〉、例えば二一世紀初頭での日本のそれを素描することなど、できるわけではない。以下の部分では、〈人間圏〉一般を議論の対象に定めるのではなく、或る特異な付加条件を加えることで、関連主題を大幅に絞ってみよう。〈人間圏〉を、それ以外と区別すると思われる区域・領域の周辺に意識を集中してみる。言い換えるなら、〈人間圏〉の境界領域に注意を注ぐということだ。〈人間圏〉にいるにはいるが、その辺縁部周辺にいる、つまり〈かろうじて人間であるような存在〉の在り方を巡る考察をしたいのだ。その意味で、この小論は一種の〈境界人間論〉を造ることを、とりあえずの目標設定として掲げる。

ところで、〈境界人間〉なるものを探そうとした途端に、ほぼ直ちに認識されること——それは、〈人間圏〉の境界などは、浮動的で曖昧、流動的で捉えどころがないということである。時空間的差異をもたない同一の〈人間圏〉でさえ、より微細に見るなら、その境界領域、その輪郭部分は絶えず揺らめき続けている。

第一、〈境界人間〉がいるなら、〈中心人間〉もいるのかという問いさえ、即答を許さない。例えばアメリカの場合、いわゆるWASPはヒスパニック系白人、黒人、アジア系移民よりは中心に近い〈中心人間〉であるようにも見える。ところが、そう述べた途端、今度は、WASP集団相互間のいろいろな階層構造（ないしは同心円構造）が透けて見える。例えばその中でも相対的に高所得・高学歴のグループと、低所得・低学歴のグループなどというように、である。もちろんここで私は、中心・境界という言葉で、自分がどう思うかではなく、しばしばそのようにグループ化されるという社会的現実や暗黙の慣習に則して記述している。中心・境界というそれなりに階層性を示唆する概念対は、なんら自明な正当性をもたない。それは、そもそも次の、より根源的な事実を思い出させるものだともいえる。〈人間圏〉は神にも自然にも成立根拠を持たない以上、人間は、自らが産み出す〈言説構制〉によって自分の正当性を構築していかねばならない。つまり或る時代、或る地域の〈人間圏〉の有りようは、そこで働く〈言説構

制〉自体による自己正当化の中にしか根拠をもたないのだ。だからその内部での中心・境界というヒエラルキーも、自明な写実というよりは、闘争的な構築に近いものになる。中心にすることが当然視されるような〈中心人間〉など、どこにもいない。

〈中心人間〉については、とりあえずここで切り上げておく。そして主題として設定した〈境界人間〉にもう一度戻ることしよう。

(B) 〈境界人間〉の有りようを調べるアプローチには、大きく二つの方向が存在するように思われる。

- ① 中心から、徐々に境界付近へと接近していき、後者の様態を探るという方法
- ② 〈人間圏〉に対して、端的に外部に存在すると思われるものから、徐々に〈人間圏〉に接近していくという方法。ただしこの場合、上記に触れたように、人間以外の動物の存在様式の調査は本稿の対象とはしない。

どちらも固有の面白さがあると思うが、まず②のアプローチに目を向けてみる。それは簡単に言うなら、大体〈人間ではないが、人間にそっくりになりつつある存在〉に相当する。現在でも既にいろいろなものがある。例えば工学的には、産業ロボット→アイボ型愛玩ロボット→ヒト型ロボット (cf. ASIMO) と来るにつれてヒト的なものに近づいていき、近未来にはアトム型の疑似人間ロボットも生まれる可能性の方が高い。さらにはロボットのように純粹に工学的というよりは、『ブレードランナー』(一九八二)でのレプリカントのように、より生化学的・生物工学的なものもある。これらの疑似人間たちには、例えばパラケルススのホムンクルス、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(一八一八)での名無しのクリーチャー、ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』(一八八六)でのハダリーなどのような〈先達〉がいる。『未来のイヴ』初出の *andréide* という言葉はアンドロイドの原型になったし、フランケンシュタイン・クリーチャーは、人造人間一般を代表するほとんど特権的な文化的アイコンになった。さらに一九六〇年代初頭にはサイバネティックスを背景に、そのフィードバック機構を強化された特殊な有機体、サイボーグ (cyborg = cybernetic organism) という概念が誕生した。こうして〈人間圏〉の境界に外側から徐々に接近する疑似人間には、ロボット、ホムンクルス、フランケンシュタイン・クリーチャー、アンドロイド、サイボー

グなど、多くのヴァリエーションがある。そのそれぞれを主題的に特化して取り上げてみても、それぞれ微妙に異なる表象圏を構成するので興味深いはずである。

(C) だが、ここでは、それら疑似人間の中でも特にゴーレム (Golem) に即して、議論を造ってみる。ただゴーレムとは何かとか、それは歴史的にどのように表象されてきたのかなどということについては、本稿冒頭に挙げた拙著『ゴーレムの生命論』でそれなりに触れたので、ここでは繰り返さない。ゴーレムは卓越したラビだけが土から造ることができる一種の人造人間だ。それは、もともとはカバラの難解な本を読み終えたとき、自分たちがきちんとその本を理解できたかどうかを確かめるために造ってみる一種の玩具のようなものだった。その創造には何の内在的目的もなかった。時代が下るにつれ、それには召使いや、用心棒という新たな要素が付け加わっていく。泥からできた泥人形、ゴーレムは、人の言うことを理解する従順な召使いだが、魂がなく一言も話すことができない。それはまさに〈人間未満の人間〉なのだ。

実は、私はもともとフランケンシュタイン論を書きたかった。だがフランケンシュタイン・クリーチャーは、元の小説だけではなく、それに靈感を受けた多くの小説、映画、漫画などによって大衆的イメージを獲得しており、人造人間の代表格としてほぼ特権的なアイコンになっている。しかも死体を切り張りしたモンスターという、その悲劇的形象は、それ以外の心象をなかなか受け付けようとしにくい。その意味で、それを論じるとき独創性を出すのは殊の外難しい。そのためまだ書けないでいる。他方、ユダヤの特殊な泥人形・ゴーレムは、まだそれほど知られているとはいえない。ユダヤ教の知識のお粗末さにもかかわらず、それについて私なりにアプローチして見ようと思ったのはそのせいだ。

しかも『ゴーレムの生命論』でも書いたことなのだが、私がより強くゴーレム論を書こうと思った一つのきっかけになることがあった。それはD・ウィスニースキーという童話作家の『土でできた大男ゴーレム』(原著一九九六)という本を読んでいたときに訪れた。そこでの一節で作者は、ユダヤの敵を撃退した後で、ラビがゴーレムを呼びかける場面を描いている。ラビがゴーレムを呼ぶと、ゴーレムはラビの元に行くのを嫌がる。なぜならゴーレムは、

もう自分が〈用済み〉だということを知っているから、ラビ・父親によって土に戻されることを知っているからだ。もし土に戻されてもあの美しい夕日を覚えていることができるのか、と問いかけるゴーレム。覚えていられないとラビに言われると、なおさら土に戻るのを嫌がるゴーレム。それでも、結局ゴーレムは額の護符を取られ、土に還っていく。

この童話では、敵との闘争での活躍にかえって怖れをなした皇帝が、あの怪物でわれわれを攻めるつもりかとラビに問いかけるという伏線がある。ラビがそれを否定すると、皇帝はユダヤ人の安全を保証するから、その代わりにあの怪物を始末しろ、と命令したのである。それにしても、ただ夕日が美しいなどと感じ、静かに佇むだけのゴーレムを、なぜラビは土に還さなければならぬと感じたのだろうか。——この問いかけが、私を衝き動かした。ゴーレムはただの土塊、ただの木偶人形にすぎず、その意味で〈人間未満の人間〉つまり〈亜人〉に過ぎないとはいえ、その〈亜人〉が命乞いをするとき、それに耳を貸す必要はないと言い切るべきなのだろうか。

だからこの問いかけがゴーレム論を書くためのそもそもの契機になった。だが、その後の調査の過程で、ウィスニースキーのゴーレムは、ゴーレムとは名ばかりの疑似ゴーレムに他ならず、ほとんどゴーレムではないということが明らかになった。なぜならまさに、ゴーレムの伝統的表象がもつ重要な特性は、それが自分の命を気遣うことなどはないこと、審美的関心などもたないこと、孤独や無聊など一切感じないこと、言葉を話すことはないこと——要するに、それは〈魂〉を持たないということだからだ。ウィスニースキーのゴーレムは、疑似ゴーレムだ。とはいってもこの場合の疑似という形容は、普通の語法とは違って、より良い方向に引きずられたニュアンスを奏でる。それはほとんど人間のような亜人間なのである。

だが、それならなおさら、ラビが命乞いを無視することには一種の酷薄さが透けて見えるともいえる。ほとんど人間のような土、だがそれが土であることに変わりはないのだから、〈土の哀願〉など聞いてやる必要はない、とでもいうかのように。

そもそも、ゴーレムは、数ある怪物群の中でも若干特殊な位置値をもつ怪物だ。土から生まれるという意味では明らかに怪物だが、怪物らしい恐ろしさ

やおぞましさがない。それは大人しく従順で、どこか間の抜けた鈍重さを醸し出す。ゴーレムは、疑似人間であると同時に疑似怪物でもあるのだ。しかも、怪物とはいっても卓越したラビによって制作されるという背景がある以上、人間にとって純粋な外部性しかない、とはいえない。先の〈境界人間論〉との兼ね合いで言うなら、非人間として外部から〈人間圏〉に接近してくるようである(②)、卓越した宗教性の体现としての意味(①)も引きずっている。ゴーレムは、一筋縄ではいかない特殊な怪物、特殊な亜人なのである。

(D) ここでもう一度〈境界人間論〉に戻ろう。良く考えて見るなら、〈人間圏〉の成り立ちを決定するのは神でも自然でもなく、人間自身だと述べたという大前提からして、そして〈言説構制〉が時代・地域によって微妙な差異を含むという点からして、〈境界人間〉の境界人間性が微妙に、そして絶えず揺れ動くというのは自明のことなのだ。われわれは超越者によって人間として造られるのではない。われわれは自然によって、人間(ヒトではなく^{ひと}人)になったのではない。われわれは人間であるというよりは、人間になる。さらに言えば、われわれは他の人間たちが造り出す言説群によって、人間だと見なされるのである。

中心・境界という価値評価を孕む概念対自体が、時空間的差異の中で絶えず揺れ動き、場合によっては一瞬反転することさえありうる。〈境界人間〉と〈中心人間〉という人間様式自体が数多くの概念的往来、交叉、逆転の力学を孕んでいる。現実的に言うなら、この場合、中心・境界という概念対は単に記述的なものであるどころか、そのどちらかに近いという判定をされれば、それに見合う処遇を受けるという、重大な社会的含意を引きずっている。まず常識的に見るなら、政治的権力や経済的権力をもつ人間たちが中心近傍にいるはずだという推定がなされる。ただ権力は含蓄の深い概念であり、しかも現代社会のような知識社会においては、科学的、文学的などの分野を問わず、多くの知識を身に付けた人間たちが中心領域に近づく。他方、伝統的には宗教的権威は揺るぎようがなく、聖性と多少とも関わりをもつ行為を付託された人物たち、優れた宗教家、法王、司祭などがもつ権力は、伝統社会ではもちろん、現代でも重要なものだ。このように、社会的処遇の違いという重大な帰結を伴うとはいえ、というより伴う

からこそ、多様な意味での権力の多寡がそのまま露わな差別や軽視をもたらさないように、いろいろな社会的装置によって調整がなされる。少なくとも公の社会空間で人間個人が取り上げられる場合、人は中心・境界といった権力的概念を傍らに押しやり、一種の抽象化と一種の社会的決断によってあらゆる人間を、それが人間だと見なしうる限り、原則的に平等・同等だと考える。——以上がとりあえずの常識的記載である。

だが、これで話が終わるならわざわざ〈境界人間論〉などという視座を設定する必要はない。いま述べた常識からは一端離れて、先に軽く触れただけだった①のアプローチ、つまり中心から徐々に境界に接近していくという手法をとってみよう。それは〈中心人間〉がもつはずの重層的権力や重層的美質・美德を一つひとつ剥ぎ取るという作業と事実上合体する。その際、〈人間未満の人間〉として特異な風姿を備えていたゴーレムをもう一度取り上げ、それを一種の操作子のように使ってみるためにゴーレム因子と名づける。ゴーレム因子を介在させながら中心から境界へと接近していく道行きは、いわば〈引き算人間論〉のような相貌を呈する。

繰り返す。社会的規範としてわれわれは、社会の構成員を原則的に平等で同等な存在だと見なす。とはいえ、そこにゴーレム因子を働かせ、境界性を発生させることは常に可能なのだ。人種の違い、宗教の違い、教養の違い、気質の違い、人脈の違いなど、数多くのマクロまたはミクロな差異があるとき、その差異が当該社会で些末なものとは見なされず、有意義な要素と見なされるとき、そこにゴーレム因子が働く余地が生まれる(少し説明すれば、差異が標準な差異として見なされるのではなく、AとBとの間に違いがあるとして、Bの方が多様な意味で周辺領域に近いと見なされる場合、その差異性認識は、Aにとっては追放や周辺化の主体として、Bにとっては追放や周辺化の客体として作用するということになる)。例えばシーア派が支配する共同体でイスラム教全体を強く否定するような発言をする人間は、恐らくあつという間に境界付近に投げやられ、それに相応しい処遇を受けるだろう。このような事例は、具体例を挙げれば切りがないはずだ。

もちろんその種の〈社会的差異一般〉についてこの小論で何か踏み込んだ話ができるわけではない。〈引き算人間論〉とはいっても、ここで行えるのはその

ごく一部に過ぎない。しかも、わざわざ差異化の契機をゴーレム因子と呼んでいるので、主にゴーレムが喚起する人工生命や垂人の周辺についてごく簡単に触れるに留めておく。

(E) まず、人間から魂、または言語を引き算してみる。だが、〈魂のない人間〉というのは、いったいどんな人間なのだろうか。日常用語では、人格の或る種の欠点や意志の弱さなどについて、その類似表現が使われる場合もある。だがゴーレム伝説では、魂の不在は言語発話の端的な不可能性として表象されている。しかし例えば失語症（ブローカ失語）の患者が正常な言語発話ができないからといって、その人には魂がないなどとは言えない。それはいい。では、進行した老人性認知症の患者は、どうなるのか。さらには重度の知的障害者や精神障害者、遷延性意識障害の患者、脳死状態の患者などは、どうなるのか。彼らは〈魂のない人間〉、〈言語を正常に使用できない人間〉ということになるのか。確かにそれらの事例においてはゴーレム因子は強く作動しているという直観があり、普通の人とは違う状態にある人々だというのが無理なく認識できる。その意味では彼らは〈境界人間〉なのかもしれない。だが、例えば脳死患者のここ数年の処遇の仕方を考えて見て欲しい。或る時は末期状態とはいえ、もちろん生きている患者、或る時はその当人の意志によって生きているとも死んでいるとも見なされる患者、そして或る時は、家族の忖度だけで既に死んだものと見なされうる患者になる。〈人間圏〉の境界は浮動性をもつと先に私は述べたが、脳死患者の場合、その浮動性は残酷なまでにあからさまになっている。それは〈瀕死の同胞〉から〈医療資源〉に至るまでの連続的なスペクトルを持ち、そのどの部分が重視されるのかは、或る時代、或る地域の〈言説構制〉の成り立ちが決定するものなのである（ちなみに私は脳死体を医療資源として扱うことには反対しているが、それは支配的言説構制に対する私なりの闘争である。だがここはそれを詳述する場ではない）。

では、次に、人間から〈生物学的な個性〉を引き算してみる。事故でもがれた腕、抜けた毛、フケ、涙、排泄物などは、普通、人間に起源をもつが人間そのものとは見なされない。もっともこの中では事故でもがれた腕は、単なる資源や物と見なされることはなく、一定の配慮と気遣いによって扱われるはずだ。それは怪我の当事者の面前であろうがなから

うが、そのような気遣いの対象になるはずだ。しかし、フケや排泄物などがそのように丁寧に扱われるとは考えにくい。では、より抽象的に器官、組織、細胞はどうか。それらも配慮の対象になるのか。職業的医師なら、彼らの日常性の中でほとんど物と同列のものとして扱われている可能性の方が高いが、普通の人間は、それが明らかに人間身体の一部だと形状などから分かる場合には、一定の配慮をもって扱う。そこに魂も、命も存在しなくても、である。ただ、もしこの文脈でゴーレムの〈未満性〉と〈人工性〉をさらに一層活性化させ、再生医学でのヒトES細胞やヒトiPS細胞などを事例として取り上げるなら、さすがにそこに何らかの意味での〈人間性の痕跡〉を見出すことは困難になるだろう。それは〈人間の残滓〉ではあるのかもしれない。だがそれは〈人間性の痕跡〉でも〈人間性の発露〉でもない。iPS細胞研究に引きずられるようにして、規制が大幅に緩和されたES細胞も、もはや再生医学の文脈では、ほぼ端的な医療資源になりつつある。

そのES細胞が話題に出た流れで、ついでに触れておくなら、受精卵の滅失（破壊）を前提とするES細胞がほぼ端的な医療資源に化けつつあるという傍らで、自然な生殖過程での〈未満性〉は、どうなるのか。それはつまり、アメリカでは有名な中絶問題とも絡んでくる。つまり初期胚や胎児の〈人間度〉の評定だ。初期胚と胎児なら、前者の方が境界性が高いように思え、その分〈人間圏〉での配慮対象からはじき飛ばされる可能性が増えてくる。だが、この事例でもあまりに明らかなように、宗教圏によっては、受精の瞬間から人間度を高く見積もる考え方も存在する。受精卵・初期胚・胎児などの生物的事実に覆い被さるようにして、〈人間圏〉の特定の〈言説構制〉がその連続的なスペクトルに処遇上の断絶を加える。どこからどこまでが人扱いで、どこからはそうではないというようなことが、自然の模写ではありえないというのは明らかだ。かくして、この問題もまた、それなりのやり方で〈境界人間論〉の一角を成すのである。

さて、文字どおりごく一部の事例、それもゴーレムの人工生命論的な性格と関係の深い事例に依りながらの例証に過ぎなかったが、このごく簡単な検討によっても、改めて次のことが確認されたはずだ。つまり人間を人間たらしめているのは、自明で自然な根拠に基づくものではないということ、そして人

間の人間性は、絶えず社会的、政治的、文化的調整の対象として存在せざるを得ないという事実である。〈人間圏〉は、自らを人間や準人間の集合体として理解し、しかもその境界領域には多くの重人や非人が徘徊するという自己理解をもつ。また、融通無碍にゴーレム因子を働かせることで、或る同心円上に佇む諸個人を、より周辺地帯、より境界地帯へと押しやるという傾性をもつ。

だからゴーレム因子は、〈人間圏〉の境界浮動性を浮き彫りにするというだけではなく、差別、無視、軽視、周辺化という眼差しの醸成と表裏一体だという意味で、不穏な政治性を抱えている。それは重人としての神話的形姿、ゴーレムを背景にしながら、自ら重人、非人、人外の肖像を焼き出すという機能をもつのだ。

(F) ここで、このゴーレム因子の不穏さを強調するために、もう少しだけ具体的に述べ立ててみよう。

ゴーレム因子の不穏さが〈他者〉に向けられる場合、例えばそれは以下のような発現をしよう。

例えば豊かな権力者は、襤褸を着て空腹に苦しむ見知らぬ他人をみて、その他人のことをゴーレムのようなもの、またはゴーレムそのものと見ることもありうる。複雑な言語を操ることができる学識者は、単純で稚拙な言語表現しかできない他人をゴーレムとして扱う。同一言語共同体にいる人間たちは、自分たちには理解できない言葉で何かを盛んに訴えようとしている人（助けて！といっているかも知れない）をゴーレムとして見るかもしれない。巧みなコミュニケーション能力をもち、社交界で自在に魅力を振りまき、他者を魅了するのが巧みな人は、木訥で人目を避け、いつも孤独がちな人間のことをゴーレムとして扱う。

言うまでもないが、この場合、〈他者〉をそのようにゴーレム化して見るという行為は原理上、相互的なものである。例えばポーランド語で愛や救助を叫ぶ人々の言葉を駄舌としてしか見ないわれわれは、ポーランドの人からは同じように思われるかもしれない。それはちょうど、かつてサルトルの他者論がそうであったような、眼差しの相克、相互の物的な視線の闘争のようなものになる。そこには、それらの闘争からは原理的に免れるいかなる特権的超越者も特権的集団もありえない。

他方、ゴーレム因子が〈他者〉ではなく、他ならぬ〈自分〉に向けられることもある。

例えば冷静・冷酷で分析的な自分は、怒りの激情に身を任せ、表情を歪める自分のことを、ほぼ同一瞬間に、または後から内省的に、一種のゴーレムだと感じ取ることができる。弁別さわやか、かつ説得的に或る事柄を論じることができる自分は、疲労や気後れ、知識不足、人見知りなどの理由で、充分には話せない自分をゴーレムだと見なす。自国語を流暢に操る自分は、外国で稚拙で単純な言葉しか話せない自分のことをゴーレムだと思う。かつて社交界の花形だった自分が、失脚または老化して孤独に閉じこもりがちになるとき、かつての自分と比べていまの自分はゴーレムだ、と感じ取る自分が存在する。

だから実を言うなら、ゴーレム因子の差異化的な設定は、先に述べたような、他者の境界方向への押しやりという契機を構成するだけではない。場合によっては、それは自分自身を分裂・破砕させ、その一部分を境界方向へと押しやるのである。ゴーレム因子は、〈他者のゴーレム化〉を活性化させるだけではなく、〈自己のゴーレム化〉をももたらす。先に私は、ゴーレム因子は差別、無視、軽視、周辺化という不穏さと表裏一体だ、と述べた。〈自己のゴーレム化〉の場合、それはいわば〈自己の自己への差別〉の発現だということになる。

そうすると、ゴーレム因子を作動させることで〈中心から境界へ〉という拡散方向の運動に身を委ねたはずの私の議論は、奇妙な帰結に達することになる。仮に〈純粹中心人間〉なるものが存在しようとしても、〈自己のゴーレム化〉という契機の存在を勘案するとき、そんなものは、文字どおりの意味では存在し得ないということが明らかになる。ゴーレムの製作者にして卓越した遣い手、伝説のラビ、マハラル (Maharal) をいま操作子的に機能化させ、自己をゴーレムとして見る場合の、その見る方の自分のあり方に注目する場合、それはあたかも自分がマハラルのような立ち位置にあるという仮構を行うことを意味する。いま、それを便宜的に〈マハラル化〉と呼ぶ。その気になれば多様な場面で多様な意味での〈自己のゴーレム化〉が完遂されうることとは、相即的に〈マハラル化〉の常態可能性を意味している。〈マハラル化〉の作業が介在することで、あらゆる人間は自己をゴーレム的に裂開させ、分裂させるのだ。

(G) だから、私が簡単に素描しようとしてきた〈境

「境界人間論」は、字義通りの意味ではここで破綻を来す。確かに、人間・準人間・非人間の重なり合うゾーンは、依然として存在し続け、その地帯に関する中立的記載をすることは依然として可能だ。例えばロボットやサイボーグの現状を、われわれは調査して詳細に報告し続けることができる。しかし、それは単なる事実の報告集のようなものであり、**論と呼べるほどのものではない。一定程度の哲学と思想を持った「境界人間論」は成り立たなくなるのだ。なぜなら、もともと「人間圏」の境界は絶えず浮動するとは言っておいたが、その際、暗黙の前提で、境界は非人間と近い所にあり、「中心」からは外れた辺縁地帯にあるはずだという想定がなされていたからだ。浮動する境界も、ゴーレム因子による境界地帯への追放も、共に図示可能なものだった。ところが、「自己のゴーレム化」により露わになったのは、境界なるものは、いわば至る所に存在するという事だった。それはもう、普通の意味では図示することができないのだ。「人間圏」における中心・境界という概念対のありさまをあえて一言で表現しようと思うのなら、昔日の神学風の「至る所に存在する中心」ではなく、「至る所に存在する周辺・境界」という表現の方が、より適切なものになる。「境界人間論」は、「人間圏」の周辺部、辺縁部、限界地点を探ろうという問題意識の元に、「かろうじて人間である人間」という、空無を抱えた存在群の調査であるはずだった。当初の予想では、その中心・境界という概念対も場合によっては反転可能だとは述べておいたが、それはあくまでも反転なのであり、その概念対の双対性自体が瓦解することはなかった。中心が境界に行ったり、境界が中心になったりすることがある、ということだけだったからだ。

ところが実際には、中心のようであり、その内部から途端に境界が発生するというのが、理論上至る所で起こるという描像に到達してしまった。いったい、誰が誰を差別し周辺化するのかもはや分からず、しかも分裂した自己の中には同時に中心と境界が住み着くという場合もあるので、「中心人間」、「境界人間」という概念対は、あくまでも限定的な妥当性しかもたないもの、しかも存在概念よりは機能概念に近いものという位置づけをもつと理解されることになる。

われわれ人間は、誰もが何らかの意味で一つの「中心」でいたいと思う存在なのかもしれない。その奥

底から光を発し、廻りを照らすとでもいうかのように、どれほど小さくても何かの光源のような存在でありたいと願う存在なのかもしれない。その願いは別に倒錯的だとはいえない。だが、光源でありたいということは、周囲を影のようなものとして見るという意味を隠し持つので、そこに不穏なゴーレム因子が蠢くことになる。しかし最終的には、その光源には、廻りに影が控えるというよりは、同時に影でもあるという特性が潜んでいることが、遅かれ早かれ明らかにならざるを得ないということなのだ。「境界人間」の自同性を暗黙の前提として、その具体的記載の羅列を起点に、その掘り下げを探究しようとする「境界人間論」は、その不可能性の前で自ら麻痺した姿を晒さざるを得ないのである。

第3節 「文化主義」の代価

(A) と、ここまで読んで読者は失望を感じ、失笑を浮かべているかもしれない。わざわざ「境界人間論」なる主題を設定し、いろいろ述べた後で、結局それは思想的に掘り下げることは困難だという結論に達するとは。しかも、その最中に語られている内容と言えば、人をいろいろな場面で差別し、排斥し、人外と見なして追放する云々の、お世辞にも楽しいとはいえない話題ばかりなのだ。他方で、確かに現実社会ではいろいろあるにしても、社会的常識ないしは社会制度として、あらゆる人間は平等かつ同等だということは確認しているというのに……。いったい、それ以上の何が言いたいのか。

これは、当然予想できる反論ないしは感想だ。

ところが、私の意図は、この反論を半ばかぶった上で、それをあえて行い続けるというところにあった。差別、排斥、追放云々が別に良いことだと思っているわけではない。それは念のために言っておく。しかし、人間社会を冷静に観察すると、まず事実として人間は互いに、容貌、知識水準、気質、経済力、政治力などのいろいろな点で微妙な差異をもっているというのが分かる。それは別に悪いことではなく、全員が文字通り同じような人間ばかりであれば、社会は実につまらないものになるだろう。多様な差異は、世界の賑々しさや興奮の源泉なのだ。少し違う存在であるからこそ、人々は互いに魅了され、啓発しあい、協力しあおうとする。しかしそれは同時に、社会構成員間で相互的または一方向的に織りなされ

る無数の距離設定、周辺化、従属要求などを産み出す契機にもなる。

注意して欲しいのは、第2節でゴーレム因子という不穏な政治的因子について触れたとき、私が主に目指そうとしていたのは、この種の因子の存在を認め、それが不穏で差別醸成的なものなのだから、とにかくそれを撤廃していこうというような議論ではなかったということだ。

繰り返す。私は別に差別や排斥、周辺化などが良いことだと思っているわけではない。しかし例えば差別撤廃運動などの運動論への直接的コミットは私の意図ではなく、また、差別撤廃のための理論装置の開発云々という作業が、私の主たる関心にはないということは自覚せざるを得ない。語法が適切かどうかは分からないが、それら、いわば社会科学的(social sciences)な問題設定は、私がここで造ろうとしている議論場とは若干逸れた方向を目指すものなのだ。言い訳めいた語調がくどいと感じる読者もいるだろうが、それなりのリスクを覚悟した議論をしているので、また附言しておきたい。私は〈社会科学的問題設定〉なるものの固有の価値、その重要性をもちろん認めている。ただ、私のここでの作業は、それとは違うといっているだけだ。

(B) では、私はいったい何をしようとしているのか。これもまた適切な語法かどうか分からないのだが、私の議論が住み着く場は、伝統的に人文科学的(humanities)と言われてきた領域の中にある。文学や哲学、宗教や歴史を主軸とするそれらの分野には、やはりそこからしか問い得ず、そこからしか一定の回答を与えることができないような問題群が存在する。それが最終的に破綻するしないに関わらず〈境界人間論〉は、人間が互いに持ちうる差異化設定的な眼差し、中心と辺縁との闘争的なやりとりなどに注目することで、人間理解に資するのである。辺縁の様態を見据えたり、中心がさらに超・中心になって神的存在に近づく可能性があるかどうかという問いかけをしたり(後者はここでは全く触れなかった)、などという過程の中で、結果的に〈人間圏〉の外延が若干拡大し、何よりその内包が一層複雑で豊かなものになる。人間文化のありさまを、可能であればその最大振幅に至るまで抱え込もうとすること、清濁の両方を無視せず、不完全性、醜悪さ、陋劣さなどをも、それもまた人間のあり方なのだと考

え、凝視し続けること。これらの作業は人文科学的なものでしかありえない。卑小さや愚鈍さ、それなりに畏敬の対象にさえなりうる激甚な悪から、滑稽なほどに小さな悪に至るまで、それら暗黒面の諸相は、自然自体の中に自らの根拠を求めることができず、〈存在〉の安定感から見放された人間たちが、逐一支払うべき代価なのだ。悪や不完全性の諸相を前にして、できればそれほど拡大しない方がいいと思いつつも、合理的な完全制御などが可能なものだと考えず、そもそも合理的制御などかえってしない方がいいと判断すること。〈人間圏〉の豊かさには、その種の影も込みになっているという見切りをすること。これらの作業は人文科学的なものでしかありえない。

他方、卓越性、高貴さ、神聖性など、従来正の価値が与えられていたものの継続的錬磨を続ける必要があるというのは、自明のことである。ただこれは、社会科学的言説空間とも協同的に作業することが、より容易になるという意味で、そこでの〈人文知〉の不可還元性の程度は相対的に弱まる。例えば正義という概念を哲学的に掘り下げる(humanities)と同時に、社会制度にどのように反映させるかを考え、それを現実にも多少なりとも反映させる(social sciences)という二重化された作業は、常に可能だからである。

いずれにしろ、この種の、人文科学的な作業とでも呼べる作業を自覚的に継続しようと思っている私にとって、あのゴーレムという形象は極めて興味深いものだ。ゴーレムは、宗教的起源をもつにもかかわらず、現代の技術社会では、ユダヤ的起源をほとんど忘却しそうになるまでに、特殊な怪物として拡大成長を遂げている。確かにコンピュータ・ゲームのキャラクターになるとときには、「とても強い」(私の息子の評価)だけの怪物として、その複雑さはほとんど払拭されているかもしれない。しかし、少しでも注意深くその歴史的起源と存在様態の含意を反省し直すなら、それは現在でも、一種の毒と一種の不穏さを抱えているということが分かるはずだ。〈人間未満の人間〉について熟考するということは、結局、「人間とは何か」という昔からの大問題に改めてわれわれを導いてくれる。ゴーレムという伝説的存在は、〈人文知〉にとって格好の活性因子なのだ。(二〇一一年春)